

＜インターネット特別展「公文書に見る日米交渉－開戦への経緯」＞に関して国立公文書館及びアジア歴史資料センター宛に抗議した一件についての

最終報告

令和4年1月11日

杉原誠四郎

平成17年より国立公文書館で公開されている＜インターネット特別展「公文書に見る日米交渉－開戦への経緯」＞に関して、国立公文書館及びアジア歴史資料センター宛に私、杉原誠四郎が抗議した一件につき、最終報告をします。

令和元年12月8日付にて、国立公文書館に向けて、＜インターネット特別展「公文書に見る日米交渉－開戦への経緯」における疑義と要請＞なる公開文書をもって、この特別展に関して国立公文書館宛に疑義と要請の表明をいたしました。

疑義と要請とは、この特別展の「参考文献」の中において、私が平成9年に刊行した『日米開戦以降の日本外交の研究』（亜紀書房）が掲載紹介されていない理由を問い質し、そして改めて掲載紹介するように要請するものでした。

本書は英訳の他、中国語訳、韓国語訳があり、日米交渉につき、他の研究書では触れていない、例

えば日本側もアメリカの外交電報をある程度解読し読んでいたという史実など、日米交渉に関する重要な史実を指摘し、また他の研究書ではあまり追究しない「最後通告」手交遅延の責任問題を厳しく問うた研究書であり、「参考文献」では掲載紹介に欠かせないものと見なせるゆえの疑義と要請でした。

その後、このインターネット特別展の制作責任はアジア歴史資料センターにあることが判明しましたが、それでその後の私と、国立公文書館及びアジア歴史資料センターとの交換書簡はすでにこの「史実を世界に発信する会」より公開しております。この公開書簡を見ても推測されるところですが、要するに平成17年当時、当該書を掲載紹介しなかったのは、他の研究書ではあまり触れていない外務省の責任を厳しく追及しているゆえと推測されるのであります。すなわち戦後、外務省が誘導した自虐史観を基盤にした上での選考だったゆえと推測されるものです。このようなことは公共機関としての国立公文書館及びアジア歴史資料センターにあっては在ってはならないことであり、許されないことです。

その後、当時衆議院議員であった原田義昭氏の強力な仲介によって、令和2年6月4日、アジア歴史資料センターにて、私と、アジア歴史資料センターのセンター長である波多野澄雄氏と直接に面会するに至りました。もとより波多野センター長は平成17年当時「参考文献」制作の直接の責任者ではありませんが、直ちに「参考文献」の刷新を近くするので、その際に当該書は紹介掲載したい旨、回答をされました。さらにまた、私の方から、当該書がいかに掲載紹介に値するものかを証明するため、例えば、「戦後の『最後通告』をめぐる責任の隠蔽について」とし、責任隠蔽が及ぼした影響や、その隠蔽の責任者は誰かというような「問い質す事項」を、波多野センター長に突き付けました。波多野センター長は研究者としての個人的見解ならばとして、その後極めて懇切に回答を寄せられました。

この「問い合わせ事項」とその回答は、私のこの度の抗議がいかに正当なものかを明らかにするために公開することを考えていたものですが、しかしそうすれば、本件はどちらかといえば私の個人的な問題として終わり、社会的に貢献するところが少ないと考えるに至りました。その上で、波多野センター長と話し合っているうちに、吉田茂をめぐる批判の対談書を出したらどうかという本の出版の企画に転換した次第です。

以来、約1年6カ月、令和3年12月20日、日米開戦80周年を期すとして『吉田茂という病－日本が世界に帰ってくるか』（自由社）、さらに令和4年1月23日に『続・吉田茂という病－日本が世界に帰ってくるか』（自由社）を出すに至りました。「問い合わせ事項」及びその回答に関する往復文書の内容より遥かに実り豊かな内容のものになっており、この国立公文書館及びアジア歴史資料センターに抗議した一件に興味を抱かれる諸氏にあつては、必ずや読んでいただきたいと思っています。

本来ならば、杉原個人の問題として、先の「問い合わせ事項」の回答を求め、「問い合わせ事項」とその回答を公開することとし、また同時に、国立公文書館及びアジア歴史資料センターに謝罪を求めるべきものとしていましたが、しかしすでに問題の当該書は令和2年12月「参考文献」で紹介掲載に至っていること、そして私的関係の強い「問い合わせ事項」とその回答の公開よりもさらに極めて社会的に意義のある吉田茂批判の対談本2冊を世に問うことになったことをもって、「問い合わせ事項」とその回答の公開は止め、国立公文書館及びアジア歴史資料センターに謝罪を求めることも取り下げることにいたしました。

このようにして円満にして意義ある結末を得たのは、たまたまアジア歴史資料センター長が波多野澄雄氏であったことによるところが大きく、氏への感謝の念を表して、本件の最終報告としたいと思います。

過程にあつては、本件は、票にはならないけれど、国家のためには重要な件であるとして、実りある解決

に向けて多大なる尽力をされた原田義昭氏に厚く礼を表し、また、本件の交換書簡の公開に労を取り、平成2年6月4日の私と波多野歴史資料センター長との面会にも立ち会っていただいた「史実を世界に発信する会」の茂木弘道氏に厚く礼を表したい。

なおまた、本件の抗議の過程で、当該書の書評をこの「史実を世界に発信する会」で発表していただいた伊達国重氏、タダシ・ハマ氏にも厚くお礼を述べておきたい。